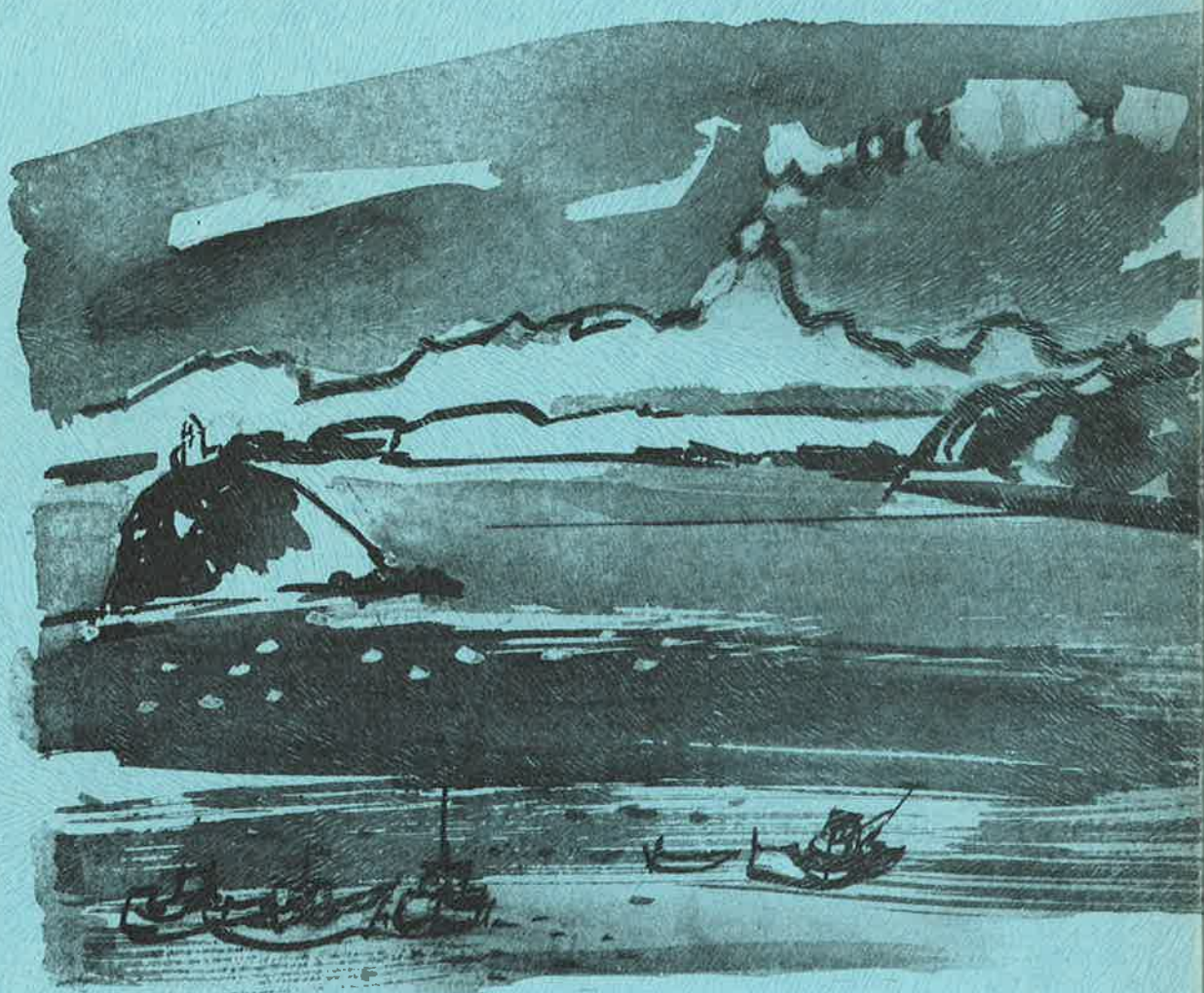


波と鳥

創刊号 1980



室蘭市医師親交会誌

誌名の由来

その昔、室蘭の湾は白鳥湾と唱えられたことがあるはずで
白鳥は哀しからずや海の青

空の青にも染まず漂よふ 牧水

医人も又、裡に哀感のある職業です。

惑わさることなく、毅然たる親交会であれと念じての事
です。

―長田先生より編集委員会あて来信―

波ノ鳥

創刊号 1980

室蘭市医師親交会誌

目次

巻頭言 親交会会誌の発刊に当って

室蘭市医師親交会会長 原田 一洋……………1

親交会記念アルバム……………2

親交会創立時の思い出など……………東 栄……………6

無 題……………長田 広……………7

親交会記念品選定について……………米沢 堡……………10

会計の苦勞話……………峰本 正一……………11

しのぶ草

齊藤義太郎先生の思い出……………柘植 重夫……………13

宮本会長と中島会長……………佐藤 善弘……………15

短歌・俳句

……………長田広・皆川英貞・曾根清孝……………16

お元気ですか——旧友通信

室蘭の思い出……………(日立市) 稻葉 真……………19

「グループ紹介」三時會……………鈴木 健弘……………20

「わが青春」「艦隊勤務—競泳の巻—」

元海軍大尉 国本 鎮雄……………21

「随想」

心に残る対話と独語……………高橋 陽夫……………23

どん足の旅(霧多布附近)……………大岩 昌生……………26

わが愛唱歌の思い出……………池田 洋二……………28

中島町今昔……………本庄 晋一……………30

わが友、野の花……………加藤 治良……………31

子供の川柳……………28

これはあんまりだ……………T 生……………29

タメになる話……………O・Y 生……………32

親交会行事略年表……………34

編集後記……………上田 智夫……………36

表紙の題字と絵

カット 加藤治良・吉井正仁・竹内隆一

加藤治良



親交会雑誌の発刊に当って

室蘭市医師親交会会長 原 田 一 洋

この度、室蘭市医師親交会が、機関誌「白鳥」を発行することになった事、まことに目出とうございます。同時に編集に当られた委員の皆様、執筆者の先生方御苦勞様でした。

かえりみますと、昭和二十七年、齊藤義太郎先生、長田広先生、東栄先生、米沢堡先生などが中核となって親交会が設立されてから、間もなく三十年になろうとしております。この間、迂余曲折はあるものの、親交会は室蘭市医師会と表裏一体となって前進をつづけ、資産も八千万円を超えとともに、旅行会、会員慶弔、或は表彰等々、会員の親睦に大きく寄与して参りました。

今回、創立時のメンバーで、長く副会長をつとめられた長田先生の発案によって機関誌の発行をみ、またその誌名も公募の結果、長田先生御推薦の「白鳥」と決まったことはまことに当を得た結果であると思います。永年住まれた第二の故郷室蘭を離れられても、この雑誌を心のきずなとして、「遠きにおいて」室蘭を思い出されるであります。

由来、医師会には公報的な性格をもった室医会報はありましたが、公式的な会議、学術部門の報告等に紙面をとられ、会員相互の、愉快な楽しい対話の部分が欠けていた様に思われます。この雑誌が発展をつづけて、欠けていた部分を補い、会員相互の親しみが更に向上する事を心から望む次第であります。

親交会記念アルバム



第一回 昭和30年9月28日 於登別第一滝本館





第二回 昭和31年6月9日 於 定山溪ホテル





昭和31年6月 中山峠にて



親交会創立時の

思い出など

東

栄

親交会が会誌発刊のはこびとなり、近く創刊号が出版されることは何よりも同慶のいたりと存じます。ところで、編集委員会から私に創立時の思い出などを書く様にとの依頼がありました。が、どうも筆をとるのは苦手でしかも三十年近い古いことですので、記憶もおぼろなこともあり、拙い文でお許しいただきたいと思えます。

まず発案の経過から申しますと、昭和二十六年頃は終戦後の混乱期を経て漸く安定に向いつつあったとはいえ、社会制度も確定せず社会保障制度などは無きに等しく、経済状態も不安定であり現在の若手の会員の方々には想像もつかない様な時期でした。丁度そんな時、ニューブラザーの全焼という不幸な事件があり、私も知人の見舞に夕刻近く訪れた道すがら、偶然あった友人の長田先生と雑談になったが、彼の言うには「現在の世相不安の折、我々医師がこの様な災害に遭った時には僅かの火災保険の保障しかない。それよりも一旦病に倒れた時、何の保障があらうか、更に不幸にして死に至った場合、遺族の保障は生命保険あるのみで心細いかぎりだ。そこでかねてから考えていることだが、何か共済的な方法で多少なりとも保障の力になるものはないだろうか、それには医師会という同業者の会があるから、会員が共同積立を行ない、親睦をはかり、会員の疾病不慮の災害等の相互扶助を行

なってはどうか」との話であった。

私は長田先生のこのアイデアを聞き、これは大変な名案だと感動し、何とか実現したいものと考えた。そこで当時医師会の「吞平三羽鳥」と余り有難くない名で呼ばれていた、彼と私と佐藤雄三君と三人で相談をして、吞むばかりが芸ではない何か医師会に役に立つこともしなければと、一念発起してこの問題に取り組むことにした。

しかしこの様な企画は他に例もなく、私共素人としてはなかなかの難事でありましたが、頭腦の良い長田先生を中心として考慮し、まず専門家に相談することとして富士銀行支店長ほかその道の方々（名前はよく覚えていないが）の見解と助言を求め、一応の試案を作製した。さて、何はともあれ医師会長の意見と同意を得ることが先決であり親しく相談しましたが、当時の会長は今亡き斎藤義太郎先生で、新制医師会初代会長として医師会の充実発展の為に活躍しておられ、その為には何よりも会員相互の親睦と和が大切だと強調されていたので、私共のこの企画に賛同されて三名のリーダーとなり、熱意を以て会の創立に尽力されたのです。

かくして種々検討を重ねた末、昭和二十七年五月医師親交会の創立発足を見るに至ったのでした。以来今日に至るまで、その目的とする会員相互の親睦を主眼として種々の事業を行ない、又、相互扶助をも併せて行なって来ました。中に特記すべき事は、「室蘭市医師会史」の医師親交会の章に、昭和四十年当時北海道医師会長の重任を負っていた今は亡き斎藤会長の所感が、上田智夫先生により記載されています。以前より、健保財政の危機によって基金よりの大巾な支払遅延が危惧され、これに対して医師会の実力斗争を覚悟していた時でもあり、この斗争が現実のものとなるならば我々医師は大変な経済不安に襲われる様な状態でした。

無 題

長 田 廣

しかし室蘭医師会だけは、親交会の積立資金（三千万円）が大きな力となり、いざという時、支払銀行からの借入についての確約を取り得たことは、会員が安心して強固な団結を以て斗争に当ることが出来ることになり、親交会の医師会へのバックアップの大きな役割を果たしたものと自負する次第です。私はこの時、故斉藤会長が会創立に当って既に近い将来のこの様な医事問題の危機を予想され、斗争資金の構想を頭に秘めておられたのではないかと思ひ、その明敏な洞察力に感動したものでした。

ともあれ、親交会も創立時二十七名であった会員が百名を越えその積立金も近く一億円に達せんとするまでに発展をとげたことは、会員の皆様と共に喜びにたえないと思います。

今、創立時の苦心を偲び感無量の想いです。それにつけても共に創立に当ったリーダー格の斉藤会長、共に協力しあつた佐藤雄三先生も既に此の世に亡く、発案者として専心企画に努力された長田先生もまた昨年当地を去られ、残された私が老いた頭脳をしぼりながら、この拙き思ひ出の記を書くことになったことは何とも寂しいかぎりです。

しかしながら、今回誌「白鳥」が創刊され、これによって昔を語り、会員相互の親睦と交流を一層深め、更に将来に向つて充実と発展の大きな力となることを念じ、私の稿を終わることにいたします。



今年の四月、東大の入学式の折の総長の挨拶の一部が、朝日新聞の「天声人語」欄に記載されていた。

「諸君はめでたく入学の榮譽を得たが、唯今の時点では、入試に落後した失意の人々に較べて、唯入学試験の点数がよかっただけに過ぎない。

エリート意識に驕る事なく、刻苦勉励して、立派な社会人となり、社会に貢献出来るよう心がけねばならない。其の一助として是非とも古典に親しまねばならない云々。」

大体そのような言葉であつたが、扨て何故に古典がひきあいにされたかは、惜しくも記載洩れで、知るよしのない事が残念に思われる。

古典を通して人間としての態度なり、氣迫なりに同化せよとの勧めであつたらうか。

或人は言う。「ただの一冊でもよい。古典を我がものにした人生は成功だつたと思える日が来る。見事に生きた人の一生には必ず一度の古典との出会いがある……」と。

日本の古典を始めとして論語、老荘の教え、聖書等は、幾多の星霜を経て多くの人々に読みつがれて来た、風雪に耐えて来たものには、深い智慧と教訓が秘められ、また、我等の先祖の生きざまが、生々しく投影されている。

一時代各ホテルの枕頭に、必ず聖書が置かれてあつた。聖書は

万巻の書に優ると言われるが、まことに奥ゆかしい事であった。奈良時代の文化は、中国、朝鮮の文化の吸収により、宮殿、仏閣、仏像を始めとして、服装迄も唐風を第一とし、主だった儀式すら、総べて唐めいた装いで行なわれ、

青丹よし寧楽の都は咲く花の

薫ふが如く今盛りなり (万葉集。小野の老。)

絢爛と咲いた爛熟の世代に尚且つ、歴史と伝統を忘れる事なく古事記、日本書記の編纂が行なわれ、王朝文学へとひきつがれた即ち其の基盤には日本民族が太古から持ち続けた卒直で飾りけのないおおらかな固有文学があり、外来文化の模倣に墮する事なく、渾然と融合し、発展した特有な日本文化を形成して、その伝統が江戸文学を経て、爾後の文化発展の温床となった。

其処には美しい心と人の世の規範が述べられている。豊饒な物質文明に心酔している現代の人は、先祖の残した伝統なる遺産に襟を正して、その故智と生きざまに学ばねばならない。

試みに彼の一代の皮肉家であり、文学者であった兼好の徒然草に眼をむけよう。

「身死して財残る事は智者のせざる所なり。よからぬもの蓄へおきたるも拙く、よきものは心をとめむとはかなし、こちたく多かる、まして口惜し。我こそ得めなど言ふものどもありて、あとに争ひたるさま悪し。後は誰にもと志すものあらば、生けらむ中にぞ譲るべき。朝夕なくてはかなはざらむ物こそあらめ、其の外は何も持たでぞあらまほしき。」

自分の死後に、財宝の残るような事は、智者のしない事であるよくないものを蓄えて置いたのもくだらないように見えるし、それかといって立派な物を残して置いたなら、それに執着したろうと、かわいそうな気がする。況やひどく沢山あるのは一層苦々しい。本人が死んだ後で、それは是非俺が貰おうなどと言う者があ

って遺産争いを起こすなどに至っては、如何にも醜態である。死後には誰々にやろうと言う希望の物があるならば、生きていううちに譲るがよい。朝夕なくては用の足りないような品物は致しかたもないが、それ以外の物は、何も持たずにいたいものである。「家居のつきづきしくあらまほしきこそ、仮りとは思へど興あるものなれ。」

住いの具合が、何もかもよく調和して出来ているのは、どうせはかない人生の仮り宿りだから、どうでもよいとは思いつながら誠に面白味のあるものである。

居は心に移すと言う言葉があるが、蓋し至言である。

中国の文学者魯迅は喝破した。「世界最古の長編であり、しかも現代文学とも見なしうる源氏物語を持っている日本人は幸福である」と。

蓋し其の構想、描写は正に現代文学のそれであり、殊には螢の巻で玉髪に教えた物語論は、永劫に変わらぬ文学論である。

古今を通じての世界の文学の珠玉として、数えあげる事に何人も異論なく、西欧においても翻訳されて広く読まれている。

其処には我等の先祖の生きざまが優しく美しく纏綿として語られ、一読すればその息吹きが脈々として肌に染み通るような思いがする。

現代の世代の若者は古典に郷愁を持ち、それへの回帰を願いながらも、漫画、ロック、ニューミュージック等に現を抜かして反文化生活に浸っているとの事であるが、外来文化の短を棄て、長を汲み取った先人の軌跡に戻らねばならない。一度古典の世界を覗けば、如何に貴い遺産を持った国民であるかが、自ら判明する事であろう。我等の小学校時代には、修身、国語の教課において古典のあれこれから題材を取り、如何にして人間は生きるべきかを繰り返し教えられた。即ち、我等は幼時既に古典を垣間見たの

だった。ゲーテは言った。「人間には遺産が必要である。ナポレオンの偉業もフランス革命と言う遺産がなかったなら、なし得なかったろう」と。

我等は先祖の遺産を尊として、徒らにエゴに走り、安易な享樂を求めつつ、若きエネルギーの発散に行方を見失っている若者達に、如何に我等は格調の高い民族であるかを教えこまなければならない。

殊に言葉の乱れと礼儀の不在は現代程、著しいものはなからう民族の伝統は次々と浸蝕されて行く。大東亜戦争の終結に当って米国は教育の課程から歴史の除外を目論んだが、歴史の抹殺は民族の滅亡を意味するとのマッカーサーの反論にあって沙汰やみになった。歴史と古典は固く結ばれている。老將軍のけい眼を多とするものである。

イギリスの議政政治創始者であるオリバー、クロンウェルは今無双の弁舌家と言われるが、彼の演説の中には何時も聖書の文句が取り入れられて、聴く人を魅了した。

翻ってわが親交会を見渡せば、親交会発会の旗頭であった齋藤義太郎氏は、民芸の外にも往くとして可ならざるはなく、彼の挨拶のなかには、「一粒の麦死なずば……」あるいは「古き袋に新しい酒を盛る」等聖書の言葉をひいて、医師会きつての弁論者であった。また、親交会の嘗ての旗手とも言うべき佐藤雄三氏は、酔うて悦にいれば

仏は常に在はするを、

現ならぬぞあはれなる。

人の足音せぬ時に、

仄かに夢に見へ給ふ。(梁塵秘抄)

と、今様歌を吟さむのが常だった。

小生の書齋の一隅には大久保東陽氏の遺句がかかげられている

まんだらの雲の影おく秋野かな

親交会で函館旅行の折、函館山での句である。

宮本素風氏もまた俳句の長老であった。外にも物故された会員のなかには、文化人が数多く見られた。

現会員の諸兄にも、民芸、園芸、短歌、俳句、絵画等に多士濟々である。必ずともに続刊の企画を計画されて、親交会の親睦と発展に寄与されるよう祈念するものである。

発案者でもあり、また再度寄稿を促されたので、敢て拙文をご覧にいった次第だが、貴い紙面を紙魚の様に蝕ばんだ思いがする医師会でのこのような雑誌の発行は室蘭医師会が先鞭をつけたのではなからうか。

将来とも道医師会のリーダー格である事を期待してやまない。



室蘭市医師親交会

記念品選定について

米澤 堡

編集子より標題について書けとの話がありましたが、何しろ第一次記念品選定は約二昔半前の事でもあり、記録、メモ等一切紛失している現在です。然し、当時の実情を知っている者は、恐らく小生一人となった今日、引き受けない訳には行かぬ羽目になって了ひました。

おぼろげな記憶を掘り起し、頼り気ない報告を書きますが、前以て、御寛恕をお願いします。

発端は親交会創設満三年（入会後三年を経て種々の恩典があると言う項目）に、記念品を贈ろうと役員会で発議され、総会です承を得た筈です。

当時の初代会長（新生医師会）斎藤義太郎先生は広汎な趣味家であった事は大方の皆さんも多分御承知の事と思います。

役員会、総会、税務対策総会（当時の税金は各自への割当制）等は常に会長宅を利用して戴き、和氣藹々、時には税務対策等では喧喧囂々なつかしい憶い出が一杯でした。

記念品選定打合せも、勿論、会長宅で行われ、会長発案で一応金沢市の宮崎寒雉の釜に決まりました。偶々小生の親戚が金沢在住の為、連絡係を任せられ、親戚を介して金沢市観光産業課（？）宮崎寒雉氏と接触する事が出来ました。やがて宮崎氏より釜の写真到来、中の一点手取釜を発注する事に決まり、一点一万円を

一寸欠ける値段でした。

富士銀行室蘭支店、室蘭保健所等にも贈呈する為、二、三ヶ余分に注文しました。やがて、桐箱に入って釜六個と手紙が着き、把手は秋草文の加賀象嵌（眼）

釜肌の文字は

嶺？ 峯の嵐 松籟

釜底には松籟の鳴銀二片が蠟付けされていると説明がありました。昨日、釜を取り出し、嶺？と読める字は風扇に造りは炎とも叟とも判読つかず、諸橋撤次の大漢和辞典を探したが、整理場所不明で、判読を諦めました。

第一回着荷後、此れ又大変時間を要しました。

昔からお釈迦（失敗品）なければ鋳物師儲かるとの諺がある通り、大量生産の工場でも、ましてや一品制作の工房では総てが完品で仕上るとは限っていませんでした。

其の後、四個、三個、五個と間遠に送られて来ましたが、完納迄に一年半余、足掛け三年も掛った事を憶えて居りますが、完納名簿順に配付しましたが、会員各位には鶴首して待たれた方も多々あったと思います。

昔、輪西に小熊整骨院兼骨董店があり、某日、家内と共に船簞笥を求めに行った折、家内が目留めた釜が寒雉作ではないかと一目で判つたらしい、それ程寒雉の釜肌は独特の風格があり、素人の家内にも判る程でした。

十数年前、日本民芸全国大会が新潟市・佐渡ヶ島で催され、室蘭民芸協会と共に京都を経て、途中、金沢市を訪ねました。前以て宮崎氏に連絡してあったので、工房を訪ね、茶菓の接待、制作工程のスライド等を見せて戴きました。豫而、素直な釜欲しいと思いましたが、試みに値段を聞いたら二五、三十万で、注文しかねて退散して来しました。

扱て釜の取扱い方を会で一応説明したもの、某医友の家を訪ねてみると、石炭ストーブの上に掛け、釜肌の美しさは無残にも消え、剩え空炊きして鳴銀も剝離して了っていたのには呆然としました。元来鉄釜は炭火の火鉢に掛け朝な夕な差し水をし、釜肌は濡布巾で拭き、完成させるものです。工芸品、民芸品でも初めから完全に美しいものはなく、朝な夕な使いこなすにつれて、益々美しさを増し完成するものと心得て欲しいと思います。現在、配付を受けた会員の内、何個が健在か一寸興味があります。

因みに 玄々斉好 手取釜

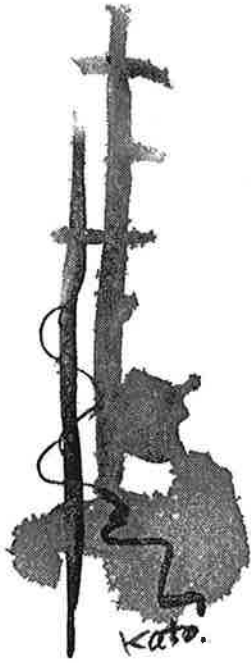
御釜師 十三代

宮崎 寒 雉

右の箱書があります。

第二、第三回記念品選定については
後日許しがあればまた書きます。

(一九八〇、八、一七記)



会計の苦勞話

峰 本 正 一

この度、親交会で会誌を発刊するので、表記のテーマで書く様とのご指名を頂きましたが、本人が苦勞話を書くのともうかと思ひますが。

十五年程会計を担当して今は開放され、フリーの立場になり当時の想い出などを書いて責を塞ぎたいと思います。私が入会させて頂いたのは昭和三十五年で、その頃は創立者で大先輩の先生方が実務を担当されて新参で若輩の会員のお世話をして頂き、恐縮しました。何時かの総会で親交会の手持ち金から積立金を除いた会としての金額をお尋ねしました所、故宮本先生がそんな事はない、お前が調べたらどうだと云われましたのが、その後、機構改革で会計のお手伝いする運命になった様に思ひます。それで会計係は故中村隆先生を長として米沢先生が補佐役で私等が実務を受持ちました。先づ、会の計理内容と財政見通しと云う、少し大上段に振冠った課題に取り組みました。当時、昭和三十九年頃は総額二、三〇〇万円の中、会としての原資は二十五万位で今後の経理運営の維持は困難の様でした。幸い、私の義弟が生命保険会社に居りましたので相談したら、先づ危険率即ち、死亡率の予測を立てるのが基本で、年度収入から危険負担と親睦の経費を案分するのが原則であると云われました。それで会員数を一定として①毎年度の積立金と②前年末の預金の利息を併せて年度収入

の見積りを立てる。次に支出は厚生省余命年数表を用いて危険率を予測し①それに対する積立金の返還と弔慰金額を算出する。②年間利息収入の五十％を親睦等の経費とし、③五十％は弔慰金の原資として保留する。以上の基本条件で二十年間の予測計を行いました。その結果、当時の規約のままでは運営困難であるが、一部を改訂して支出条件を緩和すると安定した運営が可能と云う見通しが立ちまして役員会で検討し、総会で承認されました。その後、予期以上の会員の増加とご不幸が少なかったので、極めて健全に維持運営されて行きました。

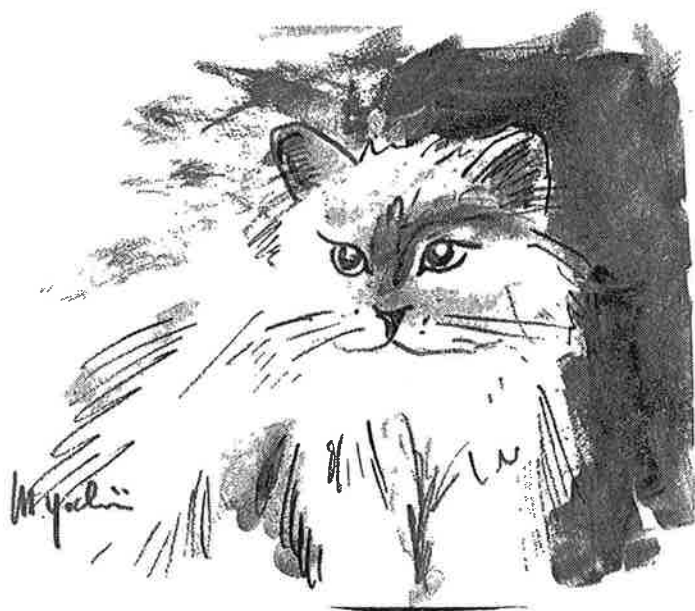
数年前、高令会員の処遇改善のご提案があり、米沢先生を長とする委員会が任命され、数種の案を立てそれぞれの子測指数を作り、検討して現在の特例措置案が出来て総会で可決されました。それにより何名かの先生方が転出時にご利用されて居ります。

その前後と思いますが、発足時とは経済の価値も著しく変動したので、積立金増額のご意見が出ました。その場合、過去の積立金と弔慰金との関連をどの様に調整するかで苦慮して居りましたら、米沢先生が弔慰金はそのままで行ってはその提議でまともなり現在の積立金に改訂されました。その時に加入月の不揃いを全部五月加入に整理させて頂き、その後の事務処理が円滑に行われました。

会計の仕事をして行くには先づ会の経営基盤の安定を念頭に置いて福祉と親睦のバランスと云いますか、どちらにも不平等にならない事、更に会員の先生方のニーズに対応して行く様に心掛けて来ました。会計係は渋いと云うご批判を頂いただろうと思いますが、心情や希望を理解しながらシビアに経済原則は守って行かんなんと云うのが苦勞と云へるかと思えます。これからの会計担当の先生方のご活躍を期待いたします。入会以来二十余年やや古参の方になり、齢も古稀に近づいて来て、今静かに過去を振り

返って色々の想い出の中に或は物故され、或は転出された先生方を含め、会員諸先生方の温かいご指導とご協力で無事に役目を終え、先般、原田会長から表彰と記念品を頂き、光栄と感激に満ちて居ります。

室蘭に在住する限り、会員の一人として従前同様のご交誼を頂きたいとお願いしまして筆を擱きます。



しのお草

齊藤義太郎先生の思い出

柘植 重夫



新制室蘭市医師会の初代の会長
齊藤義太郎さんとは、永い付き合いであったので、編輯子より、斎藤さんの思い出を書いてくれとのことであった。彼の側面の二、三をしるしてみることしよう。

私の医師生活は、今年で丁度五十年になる。そのうち室蘭で四十年、医師としての大半を、この地室蘭でお世話になり、わが人生もこの辺で第一巻の終りになることであろうが、市立室蘭病院の勤務医として、又、開業医としてつきあった医師の仲間は、数百名にもなるうか。そのうちで永い間親交を重ね、兄貴分として最も敬愛していたのが、齊藤さんであった。そして彼は、何かにつけ、私を激励し、大いに引き立ててくれたいわゆるウマのあった先輩後輩の間柄であった。彼が残した仕事は数限りなくあるが私が最も強く印象づけられたものに二つある。

一つは、彼が室蘭ロータリークラブの会長時代に国際奉仕の仕事として、英船プロビデンス号来航記念碑を、室蘭市水族館の敷地に建立し、更に大黒島にはオルソン氏の墓を、復元建立したことである。彼が同クラブの会長に推薦された時、当時ロータリー会員になって三年目の私に、会長になった以上、何でもいいから

何か一つ役に立つ仕事をしなければならぬと語っていた。

折しも、本州のロータリアンで、過ぐる日、室蘭地方の観光に來られた際、室蘭のバスガイドの説明で、一七九六年、英船プロビデンス号が、石炭や水の補給のため、室蘭港の絵鞆に寄港したが、その時、不幸にして客死した船員オルソン氏が、大黒島に葬られている。そして、その墓が今や、朽ち果てているというのを聞いたので、室蘭ロータリークラブの力で、この船員の墓を修復して、その霊を慰めて貰いたいという手紙が、金一封を添えて当クラブにとどけられた。

時の会長、齊藤さんは国際奉仕の一環として、何とかこの仕事を実現させ度いと考えた。只、お墓の修復だけではなく、この際プロビデンス号の来航記念碑も建てようと、その熱意のあるところがトントン拍子に進んで、室蘭水族館の構内に、その記念碑がそして大黒島のオルソン氏の墓が、立派な黒曜石で建てられた。

この除幕式には駐日英国大使館の領事の参列を得て、盛大に挙行された。このことは、室蘭ロータリークラブの国際奉仕の仕事としては、空前の大事業であり、日本は勿論、世界のロータリアンに深い感銘を与えたことであった。更にこの奉仕活動に關聯して私にとつては、勇気のいる付録がついたのであった。それはそのあと五年も経った昭和三十五年春、私が当市の第一号として欧州に、世界消化器病学会に参加のため、出張することになったが、齊藤さんは、欧州に行くのならロンドンにも行くだろうから、ロンドンのロータリークラブを訪ねて、あのプロビデンス号来航記念碑の写真帖を持って、国際親善をはかってくれないかとのことであった。私は早速、プロビデンス号来航の古事来歴を綴り、それを英訳してもらい、このメッセージと記念帖を携えて、単身ロンドンのロータリークラブに乗りこんで、無事その使命を果たした時は、胸のつかえが一べんにとれた感じがした。齊藤さんへの義

理が果たせたという安堵感で一杯であった。斉藤さんは、この一事でもわかるように、ものごとに徹する人であった。

もう一つの斉藤さんならではのエピソードは室蘭医師親交会が彼によって、ものの見事に、上手に政治的に活用されたことであるといえよう。ご承知の通り、昭和二十七年に、長田、東、佐藤雄三の三氏トリオの発意で、室蘭市医師親交会が発足し、会長には斉藤さんがなされた。会の目的は、会員の親睦と相互扶助であり、毎月各自三千円を献金することにした。その頃、医師会には年金制度はまだ生れていなかった。

もともと室蘭市医師会は、会員の数からいって、多からず、少なからずで、まとまりの良い会であり、殊に斉藤さんが会長になられてからは、その指導よろしきを得て、結束の固い医師会であった。この親交会の発足により、その団結は強固となり、親睦の度も増して来たといつてよい。昭和三十二、三十三年頃は、保険医療の監査、審査がきびしく、しかも医療費の改訂は、医師会の再三の要求にもかかわらず、思うに任せず、保険医の総辞退も辞せずという気運が高まっていた。その頃、斉藤さんは、北海道医師会の理事として活躍しておられ、道医の会議に於いてはこのように頑固な相手と戦うには、無手勝流では駄目だ。わが室蘭医師会では、既に数年前より、このような戦いに備えるため、軍資金を大量に蓄えていると、この親交会の基金のことを吹聴したものである。この基金は、その頃、相当な額に達していたので、彼は銀行にもいい顔になっていた。いざ総辞退に突入ということになっても、会員は不安なく戦えるため、その基金の数倍の金子が融通出来るよう予め銀行筋にも手を打っていたのであった。

このように、斉藤さんの政治力は、抜群であった。その後彼は北海道医師会の会長に推され、更に、日本医師会の理事にもトップ当選するなど、彼の並々ならぬ政治力は衆目の認めるところで

あるが、この出世街道を歩きつづけた蔭には、この室蘭医師親交会が大きな力となっていたことは否めないことであろう。斉藤さんは、当医師会を育て、それを成長させ、更に、北海道医師会として、又、日本医師会の理事として活躍された、いわば、「医師会人」として終始された非凡な医人であったといえよう。



花の山

kato.

宮本会長と 中島会長

佐藤善弘



両会長は親交会に対しては干渉しないという方針ではなかったのかと考えてます。

宮本会長時代は親交会員もふえつつあった。いわば軌道に乗ったというところでしょうが放漫な面もあった。裏話ですが「規約に役員は会員の互選により選出する」とあったが、本人が知らないうちに役員に選出され何時の間にか解任されて居つたと云うことがあり会長も参つたなあ、と頭をかかえておつたこともあったが噂さにものぼらなかつた。当時の親交会を彷彿とさせる一面でありましよう。

事業としては朝里。湯の川。登別の旅行があった。湯の川旅行は往復バスであったが帰途ある会員が泥酔し処置に往生したこともあった。それが許るされたよき時代があったのかもしれない。

会長は予期されて居つたのか旅行には出発は一緒に懇親会ともなると程々に引き揚げ、翌早朝、独りで散策、俳句を苦吟されて居つた。帰途は単独引き挙げであった。然し在蘭の総会（当時は

常盤だけ）では俳句に未練がなかったとみえ、深夜までほつつき歩いておられた。特に芸もないはずなのに何処かでこっそり習って踊ってみせたりしたが、学芸会風であった。駄弁つてるといのが本来の姿のようで松岡先生と楽しそうに飲んでおられた姿が思い出されます。昭和四四年病をえて会長をやめられ、顧問となられ、中島会長が三月新任された。

中島会長就任時。一部会員から医師会と親交会を分離し親交会長を別に選出したらと云う意見が聞かれたが、立消えになったのは幸いであった。この年昭和南山火祭りの旅行があり、大変雄大な眺めで驚いた等と話された。其の時に旅行は事業としては大切だが参加者が多くなければ意味が薄れる。あくまでも全会員の出席が望ましいと話しておられたが、今となってみれば原則としてそうあらねばならないと私共に残されたテーマとなつてしまつた。

頭脳明晰実行力のある会長だけ腹案を持っておられたようであつたが「どうだ」ぐらいで具体的なお話を聞いておかなかつた事に悔いを残してます。

酒は明朗、痛飲、ほつつき型、芸は「おいとこ」が得意。エ・モラスな演技は風格があり我々を楽しませて下さつた。よく池田満穂先生と柔道、戦争、ボートと話題多く楽しく話されて居つたのが印象的であつた。

尊敬する先輩会長と親交会と云うテーマで書くようにとのことでした。特に中島会長の急死は小生に数々の御指導を下さつた丈に意のあるところを書くことが出来なくて申し訳ありません。

両会長の御冥福を祈り筆を置きます
(参考文献室蘭医師会史)

短 歌

長 田 廣

別れ来し雪国の人思いつつ霜夜に一人酒を酌むかな

久に会いて握りし友の手の温み憂いの核に浸み渡ること

悔いのなき老いの姿を思うときふと忍びよるうつろなる翳^{かげ}

せせらぎに河鹿^{しば}数鳴き山間^{やまあい}の出湯の煙木の間隠れに^{かく}

我が触れし黒髪の香熱き肌思ひぞよする遠き昔に

燃えつきる暖房のコークスこととなれば葬所^{ははりど}の骨の崩れ^{くつ}を思う

数々の哀歎のせて洞爺湖畔ナナカマドの実^{あか}紅く秋更けにけり

春浅くまだ枯れ枯れの藪なかに人知れず咲く山椿^{やまつばき}かな

寂^{さび}しらに酌みたる酒の何時^{いつ}しかに深々として悲しかりけり

巡礼の身にあやかるか一日^{ひとひ}一日^{ひとひ}人の情は報謝のごとく

室蘭医師親交会機関紙発行に当りて

皆 川 英 貞

隔てなく良き師良き朋友睦みあひ
共に楽しむ親交の会

医師くすしてふ職責つとめ忘れてひと時を
老も若きも睦みむつ和なごみぬ

親睦つどいの集会つどいかさねて幾年いくとせか
旅行たびに祝宴うたげに思ひ出尽きず

幾いく十そ度たび集会つどいかさねて楽しめり
老も若きも一つ感懷こころに

盛りあがる祝宴うたげを飾るハイライト
大岩舞ひの身振り手振りは

俳句

元

朝

曾
根
清
孝

帰省子の元朝のベル鳴らしけり

今着きし息子伴ない初詣

初孫の笑ひなごめり今朝の春

初空を大東京で迎えけり

雪山のモルゲンロート初明り

初風呂を焚いて婿殿迎えけり

お元気ですか

旧友通信

室蘭の思い出

日立市 稲葉 真

室蘭市医師会に私が御世話になったのは昭和二十九年十一月から昭和四十一年三月迄の十一年余りであった。振り返ってみると、私は水戸で生れて二十年、東京近辺で十年、室蘭で十年、日立に来て十五年になる。思えば、室蘭の十年余りは私の第二の故郷になった。今考えるとあの頃は若年の至りで冷汗の出る様な事ばかりで、室蘭市医師会の諸先生方に御迷惑をかけ、又大部かばって頂いた事も多々あった様に思える。昭和二十九年十月。私は生れて始めて大きな船に乗って津軽海峡を渡った。一と月程前に洞爺丸が函館湾で颱風のためひっくり返り大変な犠牲者が出た年で、赤い船底を波の上に見せていた。室蘭に着いたのは夜であった。何とも心細い出発であった。幕西町の親戚の家に下宿させてもらい、大町(当時の)の一室で細々と開業した。す

ぐ前には国本亮平先生が御元気で活躍されていた。わきの常盤町に居られた今井寅雄先生には保険請求の書き方を教えて頂いた。裏手には、米沢堡先生が居られ、小公園のわきで水野谷貞寛先生が当時一番盛んな開業医として御元気であった。少しはなれて同町では大久保慶之助先生が東北弁丸出しで開業されていた。――

その中で、思い出深いのは、細谷徹先生らと開業医の野球部を作り、三大病院と試合をしてはいつも負けていた記憶がある。医師会でユニホームを作って頂き張り切った処、高橋繁介先生と大岩昌生先生が相ついでアヒレス腱を切って、えらい御迷惑をかけてしまった。又、皆川、伊藤、千葉、池田、曾根、細谷各先生と私で、夜の巷で飲む会が生れ、八人だったのでオヤツから三時会という名であった。毎月一回集まり全員必ず三次会迄ゆくのそれをものじったのかも知れない。この会は其の後、上田、加藤、高橋先生らも加はり今も続いている。由、此の春二百回記念に昔からの記録を集めて一冊にまとめて送って頂き本当になつかしく拝見した。

然し私が最も影響を受けたのは室蘭民芸協会に入れて頂いた事だった様だ。当時の医師会長であった斉藤義太郎先生が支部長であり、米沢堡先生や中村孝先生が幹事役



で、私も何となく入ったのであった。年に一回全国大会があり、京都や佐渡などへ旅行に行った。医師会では、他に、北原、池田、東、水野谷、上田各先生らが居り、趣味の旅は実に楽しい旅であった。此の民芸を唱えられた柳宗悦先生の本は、私にももの見方や捕え方に大きな指針を示し、今も民芸関係の展示を見に出かけたりしている。室蘭を離れる時、宮本栄二先生（当時医師会長）始め何十人も先生が室蘭駅迄まで送って下さったのは、私の生涯の思い出となった。其の前、別れの挨拶に、市立病院長だった柘植重夫先生の処に行った時、終戦後間もない頃、酒に酔った患者が院長からんで来た時、側にいた若い医員がみかねてぶっとばした、その野原先生というつは者が日立にいるからよろしくと云はれた。その野原先生は今の私家のすぐ近くで病院をやって居られたのにはびっくりした。日鋼病院長だった松岡幸七先生には挨拶に行った折、一枚の油絵を下さった。今も私の診療室に飾ってある。先生は其の後水戸市に移り御元氣だったが、数年前、血圧で倒れられ、御見舞にうかがった時、まだ体が不自由だった先生がわざわざ着物を着て出て来られたのには恐縮した。

日立に移って早十五年。何となく過してしまった。近頃は益々横着になって室蘭の

先生方にも御無礼し申し訳ない。日立は上野から急行で一時間四十分。太平洋と阿武隈山脈の間に細長く出来た、御承知の電気工業の街で余り自慢出来る様なものはない。然し近くは水戸に階樂園や大洗の海岸もあり、常陸太田には水戸黄門の隠居地であった質素な西山荘がある。又北には福島県に近く五浦という景観のよい海岸があり、岡倉天心が大観らをひきいて画業に精を出した処で有名であり、又隣の北茨城は野口雨情の生地でもある。

日立はやはり夏がいい。私の処から近くの河原子海岸は毎年夏休みに入ると栃木、群馬の団体客で一杯になる。何も出来ませんが御上京の折、御立寄り下さい。将来、大洗と室蘭の間をカーヘリーで結ぶという構想がこちらの新聞に出ていた。若しこの夢が実現すると、室蘭と茨城も大部近くなる

(五五、七)



三 時 会

三時會會員 鈴木健弘

三時會、奇妙な名の会である。医師会？のダンスパーティーの帰りに四人の先生達が楽しい会を作ろうと第一回の例会が開かれたのが昭和三十年九月。朝の三時まで飲んで食べて楽しくやろうということで三時會と命名。

四名の會員から出発して十五名まで増えたが病歿された先生、転居された先生など三名が減り、現在會員数十二名、専門診療科目はすべてそろっている。

昭和三十七年第一回の例会から昭和五十五年七月第二百二十五回の例会まで十八年大變な会である。

規則らしい規則はないが、毎月一回もち廻りで各自が幹事になり、幹事の決めた場所で開催を行なう。幹事はその例会の話題なり感想なりを記録に残すなど。その記録は二百回例会記念として印刷し、各會員にくばられた。又二百回を記念して一同そろって海を渡り、發会以來始めて海外で例会を行なった。この例会では彼地の著名な大学教授とのミーティングも行なわれている。

さて十八年間まだ一回の欠会もなく連綿と続き、飲屋のネエちゃんまでサンジカイを嗜し、朝の三時會って一体何なのと時々質問されたり、政治的圧力集團などと陰口をいわれ

次頁へつづく

わが青春

艦隊勤務(競泳の巻)

元海軍大尉 国 本 鎮 雄

昭和十九年夏、第五艦隊の那智、足柄、木曾、多摩、阿武隈とその麾下駆逐艦十隻は、北海道及び千島列島守備の任務を解かれ、来るべき比島方面での日米決戦に備えて瀬戸内海西端の柱島聯合艦隊訓練基地に集結していた。この基地からは北方に三年間学んだ江田島の山々や宮島の弥山が、遠く懐しく望見された。真夏の好天候に恵まれて、艦隊乗員は朝早くから夜晩くまで、訓練の明け暮れであった。

そんな中で、私の乗艦の阿武隈では、ある土曜日の午後に士気昂揚のために水泳競技が行われることになった。小躍りして喜



んだ海の猛者連中は、水を得た河童よろしく、午後の課業終了を待っては艦の周りを賑やかに泳ぎ廻って練習に励んだ。日本酒やウイスキーがふんだんに賞品として用意されたとの噂は、特に兵隊さん達を元氣付けた。海軍兵学校出身の若手士官が起居するガールームは、艦の若さの中心であって、中尉の私と少尉七名がおり、この水泳競技を楽しく盛り上げようと、設営隊、誘導隊、激励隊、殿隊、救護隊などを組織して準備を進めた。

さていよいよ当日を迎えてその昼、設営隊は航海士の指揮で内火艇を使って、かねて用意の赤旗を立てたブイ二個を、艦の右舷四百米程の所へ、横に百米程離して艦に平行に入れて帰って来た。「航海士、これで千米あるのか。」砲術士と水雷士が、同期の気安さで口を出した。「近か過ぎないか。」砲術士が部下に命じて測巨儀で計らせてみると三百五十米。横の距離を入れても往復で八百米しかなさそうだ。しかし航海士は自信満々「たっぷり千米泳いでいただきます」と答える。このやりとりを聞いていた周りの兵隊さん達は、小首をかしげながら昼食を摂りにそれぞれ艦内居住区へ降りて行った。

午後一時競技参加者五百名は上甲板に集合。当直などで参加できないもの二百名も

たり、警戒されたりしたこともあったようだが、結局始めに書いたように、気の合った連中が集まって、硬い話やら軟い話やらいいことをいい、飲んで食べて楽しく過ごす会で何はにおいても三時会に出席し、会の終ったあと、ああ楽しかった、いい会だったと思わず皆の口からもれるような会が三時会なのである。

出来るだけ艦上から声援を送ることとなった。十七、八才の少年兵から二十才のガールーム士官、副長はじめ中年の士官室士官・四十才を過ぎた入れ歯の老兵まで、我れこそは上位に入賞してウイスキーを手に入れんものと張り切っている。

午後一時半号砲一発。一斉にスタート。とは云っても五百人が一斉に舷側を離れることは大変である。艦の右舷に繋いだカッター、内火艇から泳ぎだすもの。舷側の繩梯子を降りて水に入るもの、面倒だとばかりに四米程の高さの上甲板から直接飛び込んでしまうものと、蜂の巣を突いたような大騒ぎである。

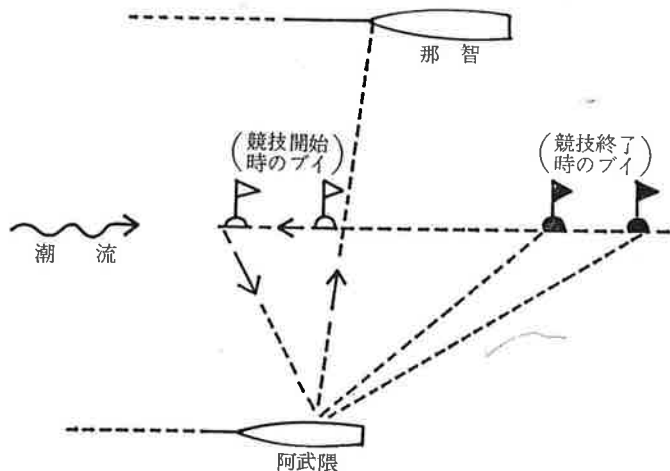
私は飛び込むなり力泳して先頭に立ち誘導の任に着く。五十米、百米と艦を離れるころには、スタートの騒動も納さまって次第に泳者の列が出来る。沖の右のブイと、二つのブイを廻って艦へ戻る千米の競泳で

ある。

晴れ上がった紺碧の空。海底までもすけて見えそうなエメラルド色の澄み切った水全く埃のない爽やかな空気の美味さ。人魚のように軽ろやかに躍動する我が肢体。ああ、なんと美しく、のどかなこと。これ程までに平和で人間らしい世界があるのに。戦争なんて、嫌なことだ。個人的にも軍艦と云った集団同志にしても、何の恨みもないものが殺し合わなければならぬとは。何のために。誰が悪いのだろう。何んとかならないものか。

クロールで先頭を行く我が一団。続いては平泳ぎあり、抜き手あり、横泳ぎありで思い思いに水しぶきを上げる。ワッショ・ワッショの勇ましい掛声も上がる。目指すブイの赤旗の向うに那智がいて、丁度旗と那智の艦首とが重さなって見えていたものが、泳ぐにつれて重さなり具合が変わって来た。旗の向うが、那智の錨甲板となり、次第に第一砲塔へと後方へずれて行く。かなりの潮の流れが出てきて、泳者も目標のブイも右へ右へと流がされているのだ。この上げ潮は当分の間強くなる一方だ。瀬戸の内海の潮流は鳴門の渦潮で有名なように、この柱島でも十ノット以上（時速二十キロ）に達することもある。のんきに泳いでいては、目標のブイ二個はどんどんと右へ流

がされて、錨を入れて動かないでいる艦との距離は次第に延びる。昼八百米に取ってあったコースが、先頭を泳いでいる私達に



も千米に延びるであらう。ゆっくりと泳いでいる者には、千五百米にも二千米にもなってしまう。時間が余り長引くと危険も出てくる。ピッチを上げて一気に泳ぎ切ってしまうように誘導しよう。「潮が強くなる

皆急げ。」

二個のブイを廻り阿武隈を目指す。艦の中央へ泳ぎ着くためには、この潮を加減して艦首を目がけて泳ぐのが良いだろう。「暫くの間、目標は艦首」と指示している間にも、先頭グループはいよいよラストスパート。元気に次ぎ次ぎと舷側にタッチしてゴールイン。タイム十五分。泳ぎ終わった者は甲板に上がって応援団に加わる。最後尾の殿隊が無事に全員の完泳を確かめて艦に上がって来た時には、実にタイム一時間を要していた。殿隊の砲術士と水雷士御苦労様でした。

早速後甲板に空き全員集合して、賞品授与式が盛大に行われた。終って、士官室へ呼ばれた航海士は、副長から「万善の事前調査により、今日の潮流変化を確実に予測して、競技を安全に楽しく完了させた功績は大である」と、お褒めにあぶかり上等なブランドー一瓶を頂戴した。かくしてガントリーム士官一同大いに面目をほどこし、艦内には飲み放題の無礼講が夜の更けるまで続いた。（終）

随想

心にのこる対話と独語

高橋陽夫

「もしもし、邦子さん。わたし今、医大にいます。驚いたでしょう。二、三日仮入院ですと。検査するんですって」（七月十四日）

仮入院が本入院となると、同時に自分の独居自炊がはじまる。家内はいつの間にか髪を両方に分け、左右二つに編んで耳の後ろに垂らし、すっかり病人らしくなった。いつも笑顔で應對し、病気のことは全くむとんじゃくともいおうか、それとも、じつと我慢しているとでもいおうか、一向苦にしないようだ。

「お父さん、病気は早期発見早期治療だからね」東京からの次男の声。

九月某日開腹術を受ける。手術は、相当時間がかかるものと覚悟していたのに、意外にも早く終わった。処置なしということですぐ閉じてしまったのである。天を仰ぎ地に伏し、慟哭せんばかりであるが、満身の

力でじつとこらえる。熱いものがさーっと目頭ににじみ、魂が抜けるようだ。なんという無情、なんという悲惨、絶望の淵に突き落とされてしまった。どうすべきか。どうしようもないのか。奇跡を信ずるより仕方がないのか。万事休す。家内は、手術は成功裏に終わったものと信じている。

「うちの人、今日わたしの顔見て泣いていたの。わたし、こんなぼんぼん、独り置いて行けないと思ったわ。手術中に亡くなる人もあるそうだからね」後日、妻の妹から聞かされた話だが、自分は不覚にも涙ぐんでいたらしい。

「こんどはいついらっしやるの。土曜日ですわね」じつと横目で、病室の壁にぶら下っているカレンダーを見つめる。

「わたしの姿はすっかり変ってしまいましたわ。こんな姿で皆様にお会いしたくないのもう以前のわたしではないですもの」

「わたし長生きしても、あんな姿（両足を開き、腰を前に出し、両手で調子をとってよろよろ歩く老婆の姿）になるまで生きたくないわ」

「世の中は、いくら生きても同じ様な気がするの。わたしお骨になって室蘭に帰るのかしら」

「向いの部屋でも、またその隣の部屋でも、この間亡くなったの。気の毒にねえ」

「おれもし一人になったらどうしたらいい」

「バイエルをも一度初めから練習しなさい」

僕は妻に見てもらって、六十の手習いを始めていたのである。

「困ったことがあったら、仏壇の前で手を合わせなさい。わたし教えてあげますから」

近代医術から見放され、やがてもうすぐ燃え切るであろう自分の生命のことを知らぬげな彼女を思うとき、実にかわいそうでならない。顔を合せるのは誠につらく、やりきれない。余命いくばくあるのか。愛憐不憫の情、誠にたえがたい。ふと医者ともあろうものが、靈驗を期待して、室蘭八幡宮に日参することを思い立った。

早朝七時、水族館行きのバスに乗る。

「先生お早いですな。こんなに朝早くか

らどちらへ」

「うん、室蘭まで切符買いに」

室蘭駅前で下車。八幡坂の五十八の石段を一気に上り、車道を横切って、第一鳥居をくぐり、更に稲妻形の長い二百二十四の石段を上り切ると、そのとたんに、はるか神殿の奥に、あかあかととぼされた四つの御神燈が目に入る。未だ人影のない静かな玉砂利の庭をまっすぐにすすみ、きざはしを上る。祭壇に向って丁寧に二拝二拍一拝して、すぐもと来た石段を引き返す。急いで下りているので、足下に気をとられ、眼下の街並も、港の景色も、周囲の木立も目に入らない。

駅前から、うまく時間に合わせた地球唄行きのバスに乗って帰宅する。丁度八時。往復一時間である。重い気持が軽くなり、すぐ朝飯の仕度にかかる。

「五人の男児を育てて四十年、これが神様からいただく褒美だろうか。今まできつと思まれ過ぎたんだわ。わたしにも悪いことなんかしていないのに」なにか思い出しているかのように独りつぶやく。

「おい、お前、おれ毎朝八幡様にお参りしてるんだよ」

「本当ですか」

秋も深まった頃である。八幡宮の参道の石段の傍で、今朝拾ったばかりの、あざや

かに黄ばんだ銀杏の葉を五、六枚、病室に持参して見せた。

「あら、お参り本当でしたのね」といって一枚の葉を手に取り、その柄を親指と人さし指の間にはさみ、くるくる回しながらじつと見詰めていた。

自宅療養のため退院することになった。かねがね、早く病院から脱出したいと願っていた妻は、病院の玄関に立って再入院以来しばらく味わったことのない大気を、晴れ渡った秋空の下で、思いきり吸い込んだのであろう。

「やっぱり外はいいですね」

長男が特別に手配してくれた黒塗りの大型車に乗る。車の中から珍らしげに外を眺めて、「まあ、なかなかまでの実が奇麗だ」と

両脇を支えられて玄関の石段を上る。洋間のソファに一休みして、再び重い体を両脇から支えられながら階段を上る。

「よいしょ、よいしょ、ああわたし上れたわ」

妻は右下腹部に、しこりが残っているのに気付いていたらしい。

「どうしてここんところのしこりが未だ残っているの」

「そのうちだんだん小さくなるよ」

「だって手術したんでしょ」

「おい、今日はおれたちの結婚記念日だな。北海道神宮にお参りして来るから」

ここで僕等は、四十年前の十一月三日に結婚式を挙げたのである。

「お祈りする前に、神様にお礼をいいなさいよ。わたしたち四十年も無事に過ごさせていただいたことを。それから五人の男の子を授けて下さったことを」

十一月も末、未だバラの囲いをしていない。七、八年前から、妻は、五十株ほどのバラ作りに熱中していたのである。

「おい、未だバラの囲いをしてないんだ。困ったなあ」

「三富士造園に頼めばすぐ来てやってくれますよ。そうして下さい」

「お前いま何を考えている」

「わたしなにも考えてなんかいません。ただこうやって足を外に出してたいの」

「起こしてちょうだい。わたしお小用したいの」

「おい、早く横になったらどうだ。疲れろぞ」

足をくずして、折り返した掛けぶとんに寄りかかるようにしてうずくまっている。

「わたし、こうしておきたいの」

夜も遅くなってから足をもんでやる。気持良さそうに眠っているようだが、呼吸がどうも喘ぎきみである。思い出したように

「ご苦労さん。もうお休みなさい」

眠っていないのである。

急を知らせたので、盛岡から、仙台から東京から、そして千葉から子供たちが急遽集まる。

「みんな朝からごたごたして何事ですかわたしご臨終とでもいうのですか。あなたがた仕事休んで来たんでしょ。仕事休む人がありますか。すぐ帰りなさい」

毎日一回午前中に、点滴注射のために、病院から婦長さんが見える。いつも点滴がはじまるまで階下で待期する。しばらくたって婦長さん帰る。

「おい、今日は随分時間がかかったようだな」

「ええ針が入るまで刺すんですもの。わたし点滴いやになったの。やめていただきたいわ」

相当我慢強い方だが、たえられなくなったらしい。

「先生は毎日診察に来て下るけれど、なんだかお役目のような気がするの。お断わりしていただいてもいいけど。でも看護婦さんには毎日お気の毒だけだね」

十二月ともなれば日没は早い。多聞迫る頃、看護の合間を見て、気晴らしにもと独り散歩に出る。片側に赤松の大木と古いおんこのある雪の坂道を、魂の抜けたような

足どりで上り、国道に出る。もう人影はない。萬感胸に迫り、思い余って、あたり憚らず、号哭しながら、雪の歩道をとぼとぼと歩いていった。ふと向い側の歩道に黒い人影があるのに気付く。立ち止まってこっちを向いているようだ。我に帰るやあわててもと来た道を引き返す。途中、歩道わきの雪を右足でなんどもなんども思いきり踏んづける。

「おれにはまだおっかちゃんがあるんだぞ。おれはまだ無妻じゃないんだぞ。まだ無妻じゃないんだぞ」と繰り返し繰り返し無我夢中で、心に叫びながら、己れに言い聞かせるのだった。

「先生、奥様の経歴を、便箋でもいいですから、汽車の中でも一寸書いて下さい」

これは、やがてお世話になるだろう町会長の言葉であった。

「お前東京で生まれたんだっけなあ。

幼稚園は茶津で……………」

「どうしてそんなこと聞くんですか」

「うう、ただ聞いて見ただけさ」

沈黙が続く。

「回り燈籠が見えるの。くるくる回る」

毎週、土曜日の午後から月曜日の朝にかけて、往復する急行「ちとせ」から眺める沿線の風景は、夏から秋へと、忽々の中に

めまぐるしく移り変わり、やがて車窓に雪がちらつき、間もなく茶の間のテレビに、恒例の忠臣蔵の舞台が中継される時が来た。十二月十四日。みんな思いなしか浮かぬ顔で、夕餉の食卓に着いている時、虫の知らせとでもいおうか、ふと妻の様子を見に上って行った長男が、すぐ階段を駆け降りて来て、ドアを開けるなり、低い慌てた声で叫んだ。

「お父さん、お母さん変です」

急いで階段を夢中で駆け上る。ついに死別の時が来た。日頃彼女が喜んでいた八十の運勢は、この時よりも六十四才で終わったのである。彼女は彼女なりに、やりたい事は未だ山ほどあったろうに、なんとも残念だったにちがいない。

遺体は病理解剖後、霊安室でしめやかな一夜を明かし、翌早朝、五人の子供らに守られて、吹雪の三十六号線を一路、なつかしの室蘭に向ったのである。

札幌で私は結婚し、札幌で妻を亡くした妻の思い出はいつも私から離れない。



どん足の旅 (霧多布附近)

大 岩 昌 生

親交会雑誌が出る事になり、楽しみです
旅行記などもたくさん載る事と思いますが、
私も一つと思って、下手な文を書きまし
た。お笑い下さい。

七月二十四日、公用で根室市に出張があ
り、会議日程が終ったあと、近くの海岸で
徒歩旅行をやる事にしました。

二十六日朝、根室駅を立ちましたが、目
的地の駅は急行が止まらないので、釧路行
の鈍行に乗りました。根室原野の単調な風
景の中を列車はのんびりと走ります。途中
厚床(あつとこ)と云う駅で止りましたら、
仲々発車しません。車掌に聞きますと、四
十分停車との事、いささかうんざりしまし
た。二輛の気動車のうち、気が付いて見た
ら私の箱にはたった一人です。

「車掌さん、降りて町の方へ行つて来て
もよいですか?」

「いいですよ。でも見るとこないですよ」

「店がありますか?」

「二軒あるよ」

「荷物置いて行きますから見て下さい」

「私も降りて用足して来るから、見てい
られないけど、ここならなくてはならないよ」
何んとのんきなものです。

浜中駅で降りて、これから徒歩で霧多布
岬に向います。テント、寝袋、食糧などを
つめたりリュックは、重さ約十二疋です。

これは私の限界で、今日の行程は十三軒余
りです。原野の中を進むうち、約三軒で海
岸に出ました。曇り空ですが、時々薄日が
さします。茫々とした浜中湾の海面は、北
国特有の濃い緑色に静まりかへっています
海岸に打ち寄せられた海藻が、遠く遠く続
いて、人一人見あたりません。奇岩、断崖
の続く海岸は、変化の面白さに心が動き、
なごやかさ、わびしさが少く感じますが、
この海の単調さはかへって詩的思索を誘い
ます。釧路時代の啄木はここを訪れたかな
十勝沖地震のため、大きな被害を受けた
のは、このあたり一帯で、防潮堤が延々と
霧多布に向って連なっています。道路か
らはづれて防潮堤の上を歩くと、はまなす
が花ざかりで、足にからんで来ます。「か

んぞう」「あやめ」「あつけしにりんそう
」などの原生群落が続いて、一人旅の感傷
をそそります。

霧多布市街のそば屋で昼食をとりました
店のおばさんに津浪の時の様子を聞きまし
たが、當時を思い出して恐しさにぞっとす
るような口振りでした。

岬の燈台までの三軒余りは、市街からす
ぐ急な登りで、少々あごが出ましたが、台
地へ出るとだらだら下りで、遠くにかすむ
海岸線は、今まだ帰らない北方領土の島々
に続いているような幻想を覚えます。微風
に汗も乾いて心地よく、キャラバンシュー
ズも軽く歩が進みます。

キャンプ場へ着いたのは、未だ日の高い午
後でした。

ハイカーの若い女性のグループと一緒に
なり、燈台近くの出店で「かじか」の味噌
汁をどんぶり一杯。

草原の中で彼女達も豪快に骨をしゃぶり汁
をすすって、ああうまかった。キャンプ場
では未だテントがちらほらです。高台に近
い方を選んで(津浪がこわい)テント設営
をしました。隣のテントに挨拶をしました
が、旭川の方からマイカーで来たと云う一
家五人のグループです。二台の車から沢山
の荷物を下して、夕食の準備にかかって
いました。附近を散策して帰ると、隣から



夕食の招待が来ました。食料の乏しい私としては、まことに有難い事です。ワンカップで乾杯、焼肉の香りにつつまれて、食慾は最高調です。たつぷりと戴きました。その頃にはテントも大分ふえて、キャンプファイヤー、歌声に楽器の音、花火の光、若者達の世界です。私もちよつぱり参加、老カニ族も青年にかへった気持ちではしゃぎました。寝袋にもぐり込んだのはもう十時頃でした。ラジオの天気予報では、明日は晴です。もう一杯のワンカップですぐ眠りにつきました。快食、快便、快眠、私はまだ健康のようです。夜中少し風が強くなり、フライシートのばたばたで一度目がさめただけでした。

朝「お隣りさん、味噌汁が出来ましたよ」と声をかけられ目が覚めました。六時です。あたりはまぶしい朝のただずまいで、絶好の晴天です。パンと味噌汁の朝食も乙

なもので、家でも時々これにしようか。テントを撤収して七時過ぎ霧多布に向けて出発、市街へ着いたら丁度厚岸行バスが出る所でした。次のバス連絡がなくて残念ながら予定の琵琶瀬（びわせ）海岸、晩暮帰（けんぼつき）島行きは割愛して、車窓から眺める事にしました。晩暮帰は、例の作家畑ムツゴロー氏の動物の島で、干潮時には洲が出来て、歩いて渡れるのだそうです。琵琶瀬展望台でバスの停車中、有名な霧多布湿原を遠望しました。見渡す限りの湿地帯に幾條もの細い川がくねくねと走っている眺めは、シベリヤの北極圏河口を思はせる何とも云い表はしような悲しげな幽玄の世界でした。

散布（ちりつぶ）地区に着きました。バスを降りたのは、渡散布と云う所です。ここから海岸沿いに養老散布、火散布、丸山散布、藻散布、と続きます。部落から部落への道は、幹線道路からはずれていて、細くて急坂ばかり、歩くと云うより這ひ上り、ぐり下りる感じで、いささか疲れました。無事生還期し難く、火散布で女房に電話をかけました。

久し振りの好天で、各部落の前浜はコンブ干しの真最中です。各戸総出で干場は戦場のようにあわただしく走り廻っています。子供達も手伝いで、店屋も皆無人、水が飲

みたくて民家に声をかけても、これ又全部留守です。浜からコンブを運んでいる小型トラクターのおっさんに会いました。

「おぢさん、水飲みたいんだけど皆んな留守で困った」

「そうだべ、今日コンブで誰も家に居ないよ。あそこに屋根の見えるところ、おらんちだ。裏から入って飲んでけ。茶もあるよ」家へ入って有難く水を頂戴しました。山からパイプで引き込んだ冷くて生きた水は格別に美味でした。

藻散布で昼食の間になりました。運よく雑貨屋があいていて、八十近くのばあさんが店番をしていました。店の者はやはり商売はつたらかしで、コンブ干しの手伝いだそうです。「マルちゃん激めん」を買ってお湯をもらい、漬物をごちそうになつて、土地の昔の話を聞かしてもらいました。ばあさん歯がぬけていてあまり良くわからなかったが、山越えの道の無かった頃は、磯舟で霧多布迄漕いで行つた。誰だかが狐にだまされて、沼にはまった事。

さてそれからが大変、ここから二十軒も人家がないし、バスは夕方まで来ないと云う。厚岸までは営業車を呼ぶしかありません。「ばあさん、ハイヤー呼びたいから電話かけて」

「ふやー、車呼んだら高い金とられべ、

学生さん

学生さんと呼ばれたのですぞ。ばあさん歯は駄目だけど耳と目は達者だと云っていたのに。「道路へ出て手を上げてろ」

つまりヒッチハイクである。道々厚岸浜中線に出て、五分程で車が来たが、これは若いアベックで、恐縮して敬遠、次の車は手拭で鉢巻をした漁師のおっさんと子供です。厚岸まで頼むと心よく乗せてくれました。途中色々な話をしていうち「お客さん、急がないなら少し遠廻りだけど、景色のいい海岸を案内してやるよ」。一も二も

わが愛唱歌の思い出

平塚尋常高等小学校の学芸会で何か二部合唱したことを記憶している位で、今も好きな歌は小学唱歌「ふるさと」であろうかしかし昔、フナをすくった小川は今もコンクリートのドブ川となり、菜の花の咲いた丘は団地となっている。ふるさとの自然の消え去ったことはこの上なく淋しいことだ
神奈川県藤沢の湘南中学に入ったのは昭和三年であった。しかし今はなつかしい校

なくお願いしまーあーす。末広（まびろ）床潭（とこたん）の海岸は本当に美しい所です。よく、写真やテレビで見る、太黒島や小島は目の前です。大橋をはさんで、厚岸駅と対岸の奔波（ぼんど）町のおっさんの家に着きました。お茶、お菓子をごちそうになるやら、ハイヤーを呼んで呉れるやら、旅行で受ける親切は身にしみて嬉しいものです。
毎年、道内、本州のどこかでカニ族旅行をやっていますが、歩ける限りやめられない。

池田洋二

歌の雰囲気は都市化によって雑然となっている。

秀麗の富士を高く 西に仰ぐこの丘
巍々たり我が校 風も薫れり
清明ここに学ぶ 我等

眉かわく常に純なり
天与の稟質磨け我と
開けよこの窓 すべて光らむ

（北原 白秋作歌 山田耕作 作曲）

子どもの川柳

〈ひかり学園児童・生徒作品〉
加納愛山 指導

- 小1 島 修 一
- 。風さーん走れる足をもつてきて
- 小2 泉 田 潤
- 。かあさんと呼んでいるばくのカレンダー
- 小3 長 尾 満
- 。さみしさと病気に負けてしまふばく
- 小4 桜 井 保 夫
- 。車椅子おやすみなさいまたあした
- 小5 大 道 ひろみ
- 。道草をしないでおいで退院日
- 小6 金 丸 明 美
- 。青空が欲しい歩行器背伸びする
- 中1 土 田 恵 子
- 。青く澄む海になりたいわたしです。
- 中2 互 野 悦 子
- 。ままならぬ右手だけれどわたしの手
- 中3 加 藤 繁 雄
- 。励ましの声と涙の大勝負
- 中3 乃 村 安 子
- 。会いに来たがんこな父に熱いもの

——内海寿彦氏推選——

次いで、昭和八年北大予科へ進んだ。その愛唱歌は有名な「都ぞ弥生」である。

(横山芳介 作詞 赤木顕次 作曲)

都ぞ弥生の雲紫に

花の香漂ふ宴遊の庭

尽きせぬ奢に濃き紅や

その春暮れては移らふ色の

夢こそ一時青き繁みに

燃えなん我胸想ひを載せて

星影冴かに光れる北を

人の世の 清き国ぞとあこがれぬ

この青春のロマンをたたえる歌を高吟し

て札幌の町を幾度かのし歩いたことか、今

も胸の高まりを覚える。しかし現在の札幌

の変わりようはどうだろう。

次いで、当時流行だったドイツウーファ

映画「会

議は躍る

」の主題

歌は今な

おなつか

しく予科

時代を思

い出す。

それか

ら北大医

学部へと

進学した

"Das gibts nur einmal "

Wein Ich, Lach Ich, traum Ich,
wach Ich,

Heute weiss Ich nicht was Ich zu

Wo Ich gehe, wo Ich stehe,

Lachen die Menschen mir zu,...

が、その
フラテ会
歌は同級
の大槻均
君作詞、
森鼻正鼻
君作曲に
なるフラ
テ会歌で
ある。
「フラ
テは平和

の光……」今、北大医学部の伝統はどうなっているのだろうか。

昭和十五年に卒業、十八年に出征してより学園から遠ざかりすぎてよくわからない昭和十八年九月近衛歩兵第四連隊の軍医としてスマトラに駐留し、終戦後約一年して字品に帰還した。スマトラでは現地の歌ブンガワンソロや白頭山節、東京ラブソデー等をよく歌ったものだった。

「これはあんまりだ」

T 生

昭和五十四年某月某日、遊ぶ事ならまかせておけ、口も八丁、おまけに食い物、飲み物にうるさい連中が集って会を開いた。

場所は仏坂を東へ一寸越えた新規開業のレストラン、名前は性質上一寸口外をはばかるが、すぐ見当はつくでしょう。

料理はおいしければよいと先方まかせでがなかなか出て来ず、ビールを飲みはじめた人もぼつぼつ。やがて一応焼き方をオーダーしたステーキが出る。味はまあまあ上等だが、寸法はまわりをベーコンで巻いたミニステーキメジャーで計ったわけじゃないが、径八センチよりは大きくないと見た。

同時にワインを持って来たが、これが何と白ワイン!!通ぶつて、赤はサンテ、ミリオンド、ボージョレーだと言う気はないが、ステ

戦後は苦しい生活の連続で思い出すような歌はないが、それでもリンゴの歌などは何も希望のなかった時代に何となく暖かいものを与えてくれた歌として今もなつかしく脳裏にぎざまれている。最近はずいぶん心に残る歌はない。はた又年をとったせいであろうか。

歌を介して青春の頃を思い出すままに駄文をつらねたことを、お許し頂きたい。

ーキを出したら、赤か、せめてロゼじゃございませんか。このあと野菜サラダとオレンヂ一個。いかに中年でもこれではたまず、みじめな思いでスパゲッティを頼む人、ライスを頼む人。

少々ムカツ腹で支払となり、再びビックリ暗闇でドッキリ、ステーキ一人前六千円也。ステーキの値段は寿司屋の料金と同じで相場があつてない様なもの、田舎者のお前が肉の値段も知らないでと笑われりゃ口を閉じるよりしかたないが、まがりなりにも「ファミリィ、レストラン」と名乗って、ミニステーキが六千円ですかね、おまけにトンチンカンな白ワインを吞ませてね。

輪西の蘭亭に行きや、同じ程度のもは五回は喰べられるよ。帝国ホテルかどこかのレストランと感じがしてるんじゃないか。これではあんまりだ、喰い物のウラミは恐いぞ、もう行くものか。

「中島町今昔」

本 庄 晋 一

中島町の今昔に就いて、何か書く様にと
言う編集者からの依頼がありましたので、
思いつくままに書いて見ますので、御笑読
くだされば幸いです。

先ず最初にお断わりしておきますが、特
別文献を読んだわけでもなく、只、私のお
ぼろげな記憶から綴ったものですから、間
違っている所もあるかと思ひますので、
その点、御容赦ください。

扱て、此の地区は定かではありませんが
明治の中頃、屯田兵が置かれてから逐次開
けた様に聞いております。

私は昭和十四年暮れに佐藤義臣先生に呼
ばれて新日鉄病院に赴任しました。当時、
新日鉄は輪西の旧工場から現在の仲町の新
工場に新築移転すべく、建設工事が着々と
進んで人口も増加の一途で、従って、従業
員の社宅が知利別から中島にかけて新築さ
れ、即此の頃から中島町に人家が増え始め
現在に至ったわけです。

併し、今のバスの工大路線から東室蘭駅
に至る間は草茫々の野地で芦が茂り、東室

蘭西口に立つと新日鉄病院が見えた程でし
た。

即、人家は数えるしか無く、此んな所が
現在の様な繁華街になろうとは想像も出来
ませんでした。知利別から輪西までのバス
が旧国道を会社の外堀に沿い、ガタガタ道
を走っていました。支那事変も遂に大東亜
戦争になり、会社も増産、又増産国民も勝
つまでは欲しがりませんの意欲に燃えて頑
張ったのですが、二十年には艦砲射撃を受
け、中島町方面は大被害を蒙った事は皆
様御承知の通りです。

かくして二十年八月終戦になり、私も十
月に新日鉄病院に復員して来しました。

二十一年、医師法も改正になり、インター
ン制度から国家試験と現在の制度に変わり
新日鉄病院にも全国から（北大、九州大、
千葉大、札幌大、岩手大、山口大等）優秀
な先生方が沢山研修に参りました。中島町
を語る前にどうしてもこれ等、インターン
諸先生の事を書かせていただかなければなら
ない訳です。言ってみれば中島町のラン

プの灯の歴史は此の人方に依って点火され
たと言っても過言ではないでしょう。

色々なエピソードも貼されました。仮令
風月のトイレの床が抜け、一足しか無い靴
を落して、翌日引揚げに行き外科の外来で
洗濯した人もあります。併し皆さん、秀才
揃で国家試験は一〇〇％合格され、現在、
大学教授、助教授で学会に名声を馳ている
人、又、公立病院の要職にある人、地方医
師会の役員として活躍されている人、多士
済々であります。頼もしいかぎりです。こ
れも中島町の昔が良かったのでしよう。

扱て、次は中島町の今ですが、小院のあ
る此の辺は狐も狸も出ない水溜りだった所
が、破竹の勢いで延び始め、最近では浜町
が移転したの感があります。新浜町とでも
名づけた方が良いでしょう。会員諸先生の
御来遊をお待ちしておりますとはスナック
「雀」の伝言です。

以上駄文を草して擲筆します。八月五日



わが友、野の花

加 藤 治 良

季節を追って野の花を撮り始めてから六年程になる。動機は私自身はつきりしない。港に船の出入が少なくなったのも理由の一つらしい。三年周期でキャンパスに対つて来たけれど、いやらしい絵の連続に愛想をつかし、イーゼルをしまいこんだままになったのも、誘因の一つらしい。ともあれ、風のそよぎと季節々々の光の中にゆれる、可憐な彼女等とつき合つてからは、庭花は横目で眺めるだけになってしまった。「なぜ、それ程までに飾り立て、厚化粧をするのかね。」

8ミリフィルム、スライド、共にあきれんばかりの量にはなったが絵になったものは殆んどない。先頃、三分の一ほどは整理して捨ててしまった。それでもエトモ半島歩きは止められない。観光道路で頭髪をふり乱し乍らフアインダーを覗いていると、通りがかりの車は間違ひなく一時停止してくれる。昨年の春、早朝のトツカリショでカワラナデシコの周囲をぐるぐるまわっていたら、犬をつれたぢいさんが近寄つて来

た。何を写しているのかと尋ねられて、ホラ、可愛いでしょう、この花。顔を見合せて、オヤ、先生かい……いい道楽だねえ。と賞められた。

道楽か、成る程。それにはちがいないから、当然、悩みも生じてくる。

名前の知らない花は、どういうわけかい加減に撮つてしまふ。勿論気になるから図鑑相手に悪戦苦闘するのだが、図鑑なるものは何冊そろえても八十%の教師ではない。然るべき人にたづねるのが最良の方法と知りながら、それも億劫。納得する迄シーズンのいくつかを過すことになるわけだ。

自然の理で場所により別人かなと思わせる顔付きをしていることだってある。林内路傍、岬風の強い草原では、背丈も花の大きさも倍以上の差が私を惑わせる。やはり分類の原則に従つて分析するのが一番で、面倒なようでも何科の何属の——基礎的知識だけでも心得ておくべきだとさとした。

x

エトモ半島の植物は種類が豊富なのだそう。港町の例にもれず帰化植物だけでも七十種を数えるらしい。

四月、新芽から幼葉、若葉、新緑と一週毎に生長してゆくエネルギーはすばらしい。そして花の季節がつづく。八幡神社のお祭りが終るころから私の好きな秋の気配。海の色、雲の彩に微妙な変化があらわれ、逆光シーズンの訪れだ。黄葉、紅葉、やがて岬の風に真向いながらカシワの群落が彼等の歌をうたい出す。

枯木立、これもいい。道端のハチジョウナがすっかり白髪になって、あられを一つ二つつけて震えているのも風情なのだ。師走、新春と俗世の行事にかかづらっているうち、何時しかドカ雪の二、三回もあって……フキノトウが顔を見せはじめ。

自分としては、絵筆をレンズに換えただけのつもりだから、人に語り得るほどの植物知識は持ち合せてもいなければ身につけようとも思っていない。エトモ半島もウラハマと同じように行きつけの場所がいくつかある。私好みの歌をうたわせてくれ、話相手になってくれる、という点ではかわりない。

○トツカリショ……海霧の発生地。海風をまともに受ける。春、黄色のハルザキヤマガラシの一群が目立っていたが、去年、

今年と心細くなってきた。カワラマツバ、エゾカンゾウ、マツヨイグサの背丈は低く目立つのは、カワラナデシコ、エゾノコンギク、ナンテンハギ。処々にノハナシヨウブ、ヤマブキシヨウマ、タチギボウシ、ナガバノキタアザミ。圧巻は大沢に通じる道路沿いのコハマギク。初秋のナガバノシロワレモコウが絵になる。

○チャラツナイ周辺……観光道路を歩きさえすれば、季節毎、たいていの花に出合う。五月、キジムシロの黄。六月末からアマニユウの仲間の白い傘形の花が目立つ。ヤマハギの茂る頃なら、注意深く眼をこらしめて、ヌスビトハギ、ハナタデの数茎をさがし求める。途中、入江に下る側道がある。

ここが実にうれしい場所なのだ。ヒトリシヅカ、ハナカタクリ、ニリンソウ、タチツボスミレ、エゾノヨツバムグラ、コンロンソウ、ミミナグサ、ダイコンソウ、トリカブト、オカトラノオ、ハエドクソウ、それにヤマハツカなど。フデリンドウ、オオバキスミレに出遭ったのも此処だ。

チャラツナイから岬ひとつ超えた左手に旧塵芥捨場がひろがる。現場だった頃は、鶯の大群が、ヒッチコック映画「鳥」さながらに、上空をおおいつくして乱舞する毎日だった。ヒメオドリコソウ、イヌノフグリ、ヒメジョオン、ヒメスイバ、コヌカグサ

オオアワダチソウ、オオンハゴンソウ、ほとんど帰化植物だ。とりわけ、イヌカミツレ、コシカギクがふえつづけ、アメリカセンダンソウも仲間に入ってきた。イヌカミツレの白い帯が、夏空の下、一面に揺れうごく光景は美事。ほかに言い様はない。

○測量山からオハシナイ……昔ながらに林間道路と呼んでこそ、ふさわしい。観光道路ではないけない。夏の初めのエゾニワトコ、それから、ガマズミ、カンボク、ツルアジサイ、サビタ、いづれも白い樹の花が美しい。道沿いならば、シモツケソウ、ヒヨドリバナ、エゾゴマナ、シラヤマギク。林内なら、春先のマイヅルソウ、エンレイソウを楽しむ絶好の場所もある。

マスイチのWC裏のママコノシリヌグイは、いつか姿を消した。ヒルガオ、オトギリソウ、キンミズヒキの一かたまりは未だ残っている。

○エトモ岬……少年の頃の遊び場だったかつての丘、畠、樹林は、縦横に走る道路と新しい住宅の屋根々々の構図に一変し、荒々涼々たる岬の面影は何処にもない。

イチゴと笹原の坊主山は、戦時中の高射砲陣地から展望台に、そして、対岸の有珠岳さえもフタコブらしくの背ではなくなった。だが、植物たちも人間と機械に負けて

タメになる話

O・Y

その一。「お客さん、すいませんが窓、しめてください。」ボサーと車の外を見ていたら運転手氏から声がかかった。言われるがままに半開きの窓を閉めたが、やはり嫌な臭いが入って来る。

運氏「ここ大昭和って紙作ってる工場なんですヨウ。白老ちよっと過ぎて、北吉原ちうとこですがネ。」ボク「ウン。」運氏「製紙工場って変な臭いがするしヨッ。お客さん初めてですか?。」ボク「何が?。」運氏「この国道三十六号通るのさ。」ボク「いや。」運氏「したらこっちの人で?。」

ボク「ウン。室蘭だも、〇〇〇へ行った婦りだも。」運氏「アアそうすか。ならいいけど、前にここ通った時、大失敗したもんだからさあ。」ボク「なんかしたのかい?。」

運氏「やあ、前にね、かなり年輩の夫婦のお客さん登別まで乗した時にね…。やあ参ったんだあ。」

その時の状況を詳しく話すところなる。この運転手氏のタクシーが北吉原にさしかかった時、うしろの例のお客さん夫婦。妻「あなたいやねエー。」夫「ん、俺でないよ。」ルームミラーには後席のお二人の凝視した顔が映し出されていたそうなる。

またボクへの話。運氏「あん時ならホントに参ったあ。すぐ言う訳にいかねえしさあ。虎杖浜へんまできてやっと大昭和の話したけ

ばかりはいないようだ。削られ、切りとられた斜面の一つ、「フウロソウの丘」と私と呼んでいる此の場所は、数年来、いろんな連中がしやれた花園をつくりつつある。

ハナニガナ、クサフジ、ヘラオオバコ、ナミキソウ、エゾタツナミソウ、ノコギリソウ、オオヤマフスマ、カワラナデシコ、モジブリ、ヒメジョン、マツヨイグサ、キリンソウ、ナンテンハギ、クサレダマ、ツリガネニンジン、ヤマブキシヨウマ、エゾスカシユリ、そして、フウロソウ（風露草）。

今年は殊に、クサレダマ（イオウソウ）ヒメジョン、ツリガネニンジンが多生して黄、白、紫、それぞれに背丈一ばい、海風に吹かれながらセグロカモメの飛翔を見上げている。

×

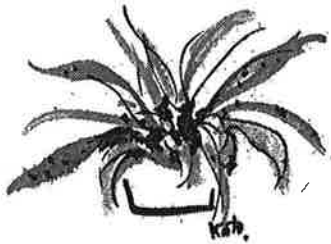
草花を手折ったことはない。自然光の中で、自然のたたずまいのままを撮るわけだから、割と時間がかかる。一時間以上おなじ場所から動けないことだってある。

入江地区が埋立てられフェリー埠頭が出現した。臨海公園も並べて造られた。いづれ、官公署も移転すると云う。結構なことだ。

茶津寄りの、とらんすぼーた、ろーだーの活躍したあたりは、炭かす混りの荒土な

のだが、オオイタドリ、コガネギク、ユウゼンギク、ムシトリナデシコ、ノボロギクナズナ、ヒメスイバ、ヒレハリソウ（コンフリ）、ハマツメクサ、ヒメムカシヨモギ、コウゾリナ、イヌタデ。数は少なく、おしなべて小柄だが、べら号の発着をば何ともつましい顔付きで眺めているのだ。

あえてタブーを破り、ムシトリナデシコの赤と白、二本づつを猫の額の吾庭に移し植えた。移植べらの先端が火花を発するほど固い固い石土なのに、きつしりと根をおろしていた。目下、トラックが土を運び、次々に盛り上げている。公園はいい。しかし、花壇にせよフラワーボックスにせよ、所詮は人工花のお飾りにちがいない。来年の彼女たちを見ることは、おそらく、無理だと思った。



どさ、二人ともなんも返事しないもんだからさあ、参ったあ。」ボク「なるほどねえ。ボクも誰かはじめてここ通る人のせてる時、早目に言うことにしたらいいネエ。」運氏「いやあ、あん時ならホントに参ったあ。」（千才から利用した個人タクシーでのこと）

その二。イーグル。アルパトロス（あほう鳥）。どちらもヘボチョコゴルフアーの僕には全く無縁の名鳥の名であるが、ブービー（かつお鳥）となると何度か我手で抱いたことがあるので、つい、ウーッと身を乗り出さざるを得なくなる。

さて、ブービーとはかつお鳥のことなり。この鳥、極めて温厚、愚鈍で物おじせず悪い人間が忍び寄っても逃げようとせず、人に例えれば類なきお人好。一見、紳士を装った腹黒い輩が頃合いをみて素早く首根っこを掴えればなんなく捌り、あとの祭りになってからバタバタ賑ぐとのこと、即ちブービーとは馬鹿モンのことなり。（出典、ゴルフダイジェスト）

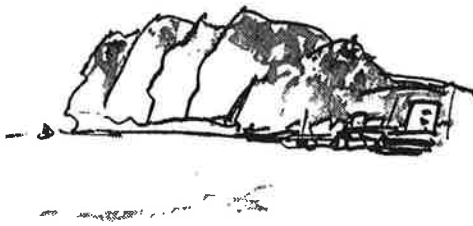
若し汝に知性の一片でもあるならばブービー賞目当にコンペに臨み予定通りに手にしたからとて人前でかざすような破廉恥な振舞いはなすべからず。幸運にも大きな賞品を貰ったとて家に到る前にラベルを剥がすか、予め家人にはブービーとは二位のことと云い含めておくべし。

そして万年ブービーが己のゴルフでないと悟ったならば密かに人目につかぬ時と所を求め、切磋琢磨、一層奮励努力して、道具が悪けりやまたまたクラブを新調して次のコンペに備えること心すべし。

親交会行事略年表

昭和二十七年	五月一日	親交会結成。会長 齊藤義太郎
昭和三十一年	九月二八日	登録第一滝本館にて総会懇親会
昭和三十一年	五月二九日	定山溪ホテルにて総会懇親会
昭和三十一年	八月一日	洞爺観光ホテルにて総会懇親会
昭和三十一年	七月二〇日	北海道博覧会見学
昭和三十一年	五月三十一日	カルルス温泉にて懇親会
昭和三十四年	〇月二四日	湯の川にて観楓会
昭和三十五年	九月一七日	クッタラ湖にて野外パーティー
昭和三十七年	八月一八日	支笏湖グラントホテルにて総会懇親会
昭和三十八年	七月二〇日	層雲峡ホテル大雪にて総会懇親会
昭和三十九年	七月一日	定期総会にて規約一部改正
昭和四〇年	三月三十一日	齊藤前会長顧問となり新会長宮本米二
昭和四一年	七月一六日	朝里観光ホテルにて総会懇親会
昭和四二年	五月三十一日	登録グラントホテルにて一五周年記念総会
昭和四三年	五月五日	齊藤(義)、長田、東、佐藤(雄)各氏に記念品
昭和四三年	八月一〇日	湯の川にて総会懇親会
昭和四四年	三月三十一日	宮本米二前会長顧問となり、新会長中島勝美
昭和四四年	八月二日	洞爺湖にて昭和南山火まつり見学
昭和四五年	一月一八日	中島会長急死、後継会長佐藤善弘
昭和四五年	七月一八日	札幌グラントホテルにて総会懇親会
昭和四六年	五月二〇日	常盤にて定期総会懇親会
昭和四六年	二月一〇日	ニュージャパンにて忘年会
昭和四七年	五月二九日	常盤にて総会懇親会二〇周年記念品配布
昭和四七年	二月二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和四八年	五月二六日	常盤にて総会懇親会
昭和四八年	七月一七日	室蘭外港めぐり
昭和四八年	二月二九日	ニュージャパンにて忘年会
昭和四九年	五月二四日	常盤にて総会懇親会
昭和四九年	七月二三日	洞爺レックホテル親睦旅行
昭和四九年	二月二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五〇年	六月二二日	登録グラントホテルにて総会懇親会規約改正
昭和五〇年	二月二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五一年	五月一八日	八芳園にて総会懇親会

昭和五一年	九月一八日	栗林家庭園にて野外パーティー
昭和五一年	十二月九日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五二年	三月三十一日	原田一洋新会長
昭和五二年	五月二七日	医師会館にて総会懇親会
昭和五二年	七月二三日	十勝川温泉、池田ワイン城、親睦旅行
昭和五二年	一月二二日	医師会館にて二五周年記念式典常盤にて祝賀会
		長田、東、佐藤(善) 米沢、曾根、峰本、高橋
		(繁)各氏に記念品
昭和五二年	二月九日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五三年	五月二五日	ニュージャパンにて総会懇親会
昭和五三年	七月二二日	小樽(天望閣)余市(あゆみ荘) 親睦旅行
昭和五四年	五月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五四年	六月九日	ニュージャパンにて総会懇親会
昭和五四年	二月二二日	湯の川若松、及び大沼大洋ホテル親睦旅行
昭和五五年	五月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五五年	六月七日	ニュージャパンにて総会懇親会
		札幌センチュリーホテル、アサヒビール
		園親睦旅行



何ヶ峠岩

Kato.

編集後記

「ひょうたんから駒」と言う言葉があるが、親交会二十数年の歴史から、年刊の雑誌が生まれたのは、全くの偶然であるようだ。長田先輩から強力に働きかけられた大岩事業部長は、右せんか左せんか大いに迷った。当然の事だが、会計さんは余分な支出にはあまりいい顔はしない。とどのつまり、編集委員なるものが任命され、我々が火中の栗を拾うこととなった。

原稿については「創刊号」の故もあって余り心配はしなかったが、編集部では、なるべく固くならない様に、寝ころんで読みながら思わず笑い出す様な部分と、間もなく三十年になる親交会の創立の苦心談に焦点をしばったが、出来あがってみると、やや固かったかなあとと思うのが実感であるが、創刊だけに止むを得なかったと思う。

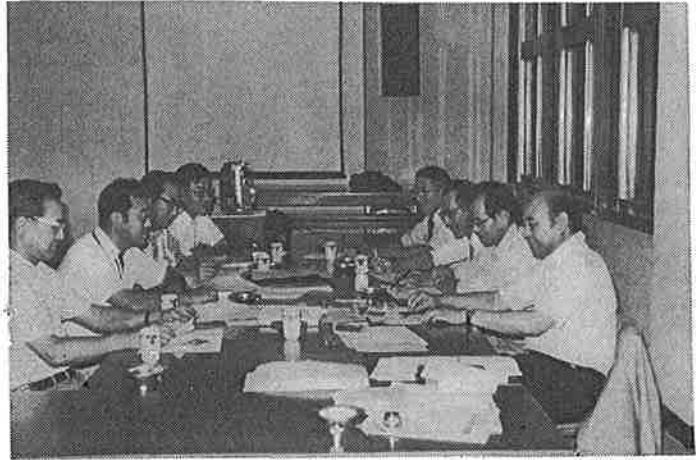
編集スタッフは大変有能で、中でも加藤先生の表紙絵、題字その他のセンスには、思わずこれが医者か、医者にしておくのは惜しいと舌を巻いた。実質的編集は加藤先生である。

大岩部長は、一人で各企業の寄付を集められ、もっとも皆の嫌うところを、全責任を持たれたのには頭が下った。この外小国先生の速記等々記すべき事は多いが、紙面もつきた。

問題は次号以下であると思うので、リレー随想その他に、各先生の健筆を期待しています。

今からひそかに御準備のほどを……

(上田)



編集同人（アイウエオ順）

上田 智夫
大岩 昌生
大久保 洋平
小国 親久
加藤 治良
高島 信治
三村 博道
村井 乙

親交会誌
波 久 鳥

発行日 昭和五十五年十月十日

発行所 室蘭市医師親交会
印刷所 室蘭印刷株式会社

協
賛
商
社

創業80周年を迎えて

親しみ、ますます

室蘭支店	海岸町 2-4-6 TEL 23-0123
輪西支店	輪西町 1-21-1 TEL 44-5158
東室蘭支店	中島町 1-19-1 TEL 44-4745

■海外 14拠点 ■北海道 180店
■名古屋・大阪 京都・神戸 7店
■東北・関東 56店



こまやかな おつきあい

たくぎん

北海道拓殖銀行

ザ・スーパースター
新型ブルーバード

9ヶ月連続 No.1 達成!!



北海道日産自動車株式会社

室蘭支店

室蘭市日の出町3丁目7番10号
電話代表 (0143) 44-2101番

新型

コロナは快適さ独占!

コロナは、(ゆとり安全)。

イライラさせない疲れを呼ばない快適さ、新型コロナはサイレント・ボディ。
北海道の街々に札幌トヨペットがお届けしています。

ゆとり安全

新型コロナ

1600 1800 2000



コロナ1800リフトバックSL-EFI

オートセンスは、いま最もすすんだ
コンピュータ・エンジン総合診断システム。
“完全整備”を実現します。



ようこそあふれるクルマ社会をめざして



コロナ・マークII・コルサ/トヨエース・ハイエース
コロナバン・マークIIバン
札幌トヨペット

本社=札幌市豊平区月寒東1条14丁目1-1 ☎011-851-8181

取締役社長 岩澤 靖

0143
室蘭営業所 ☎ 44-2111
室蘭市日の出町2丁目31番27

北海道医薬品卸商業組合

(アイウエオ順)

総合医薬品卸



株式会社

秋山愛生館

多田薬品株式会社

医薬品卸



ホシ伊藤株式会社

医薬品総合卸

株式会社

モロオ

の 山形薬業株式会社

むろしんは

室蘭市内 9 店舗

登別市内 4 店舗

とどこのマチにも

支店があります。

社会保険の支払基金からの振込指定

医療金融公庫の取扱など

みじかな、金融機関として

ご利用のほどお願いします。

室 蘭 信 用 金 庫



山之内製薬株式会社

103 東京都中央区日本橋本町2-5



三共株式会社



あしたの朝をさわやかに。

就寝中の過剰な胃液分泌が胃粘膜のあれやただれの原因になります。
 サクロンSは就寝前に服用してください。
 過剰な胃液を中和し、主成分の銅クロロフィリンナトリウムは
 胃粘膜のあれ、ただれに効果的です。



適応症／急性・慢性胃カタル、胃酸過多、
 胃痛、胃のもたれ、むかつき、はきけ、
 胃障害による口臭、二日酔い。
 用法・用量／通常、成人は1回1包、
 1日3回、就寝前および食間空腹時に服用。

やす
 お寝みまえに 緑の胃ぐすり **サクロンS**

合成セファロスポリン

セファメジン®

筋注用
注射用

〈日抗基：注射用セファゾリンナトリウム〉

要指示

〈薬効・作用〉

■グラム陽性・陰性にわたる抗菌スペクトルを有し、なかでもグラム陰性桿菌(特に大腸菌、肺炎桿菌)に対してすぐれた殺菌作用を示します。

■筋注または静注により高い血中濃度が得られ、体内では殆ど代謝されることなく尿中、胆汁中に高濃度で排泄されます。

適応症、用法・用量及び使用上の注意は製品添付文書をご参照ください。

■健保適用



国産で初めてのセファロスポリン系抗生物質
すぐれた殺菌作用 体液・組織内移行を示す

フジサワ

藤沢薬品工業株式会社 登録商標
大阪市東区道修町4丁目3番541 ☎(06)202-1141

膀胱炎・腎盂腎炎に

●薬価基準：収載●

(要指) 経口用合成ペニシリン製剤

メリシン錠

(日抗基：塩酸ピブメリシナム錠)

「タケタ」

効能・効果

他の抗生剤に耐性でメシリナムに感性的大腸菌、肺炎桿菌、エンテロバクター、シトロバクター、プロテウス・ミラビリス、プロテウス・ブルガリス、プロテウス・モルガニー、プロテウス・レトゲリによる次の感染症：膀胱炎、腎盂腎炎。

使用上の注意

① 一般的注意

ショックなどの反応を予測するため、十分な問診をすること。

② 次の患者には投与しないこと

既往にペニシリン系薬剤に対する過敏症を起こした患者。

③ 次の患者には慎重に投与すること

(1) 既往にセファロスポリン系薬剤に対する過敏症を起こした患者。
(2) 本人または両親、兄弟に気管支喘息、発疹、じん麻疹などのアレルギー反応を起こしやすい体質を有する患者。
(3) 高度の腎障害のある患者。

④ 副作用

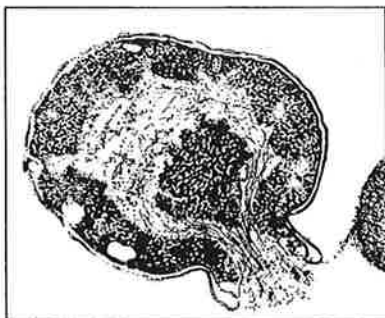
(1) ショック：まれにショック症状を起こすことがあるので、観察を十分に行い、不快感、口内異常感、喘鳴、眩暈、便意、耳鳴などの症状があらわれた場合には投与を中止すること。
(2) 過敏症：発熱、発疹、じん麻疹などのアレルギー症状があらわれた場合には投与を中止すること。
(3) 血液：ときに赤血球減少などがあらわれることがある。
(4) 肝臓：ときにS-GOT、S-GPTなどの上昇があらわれることがある。
(5) 胃腸：ときに悪心、嘔吐、食欲不振、胸やけ、腹痛、下痢などがあらわれることがある。
(6) 菌交代現象：まれに口内炎、カンジダ症を起こすことがある。

⑤ 妊婦への投与

妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦または妊娠している可能性のある婦人には治療上の有益性が危険性を上まわると判断される場合にのみ投与すること。

※用法・用量等については、現品に添付の説明書をよくご覧ください。

昭和55年2月作成：MELB52-51



抗菌作用により、菌体(大腸菌)の一部がさけ、内容物が流出する瞬間の超薄切片像。

●資料提供：京都医科大学・微生物学教室

MELYSIN®

武田薬品工業株式会社
大阪市東区道修町2丁目27番地

脂質代謝異常の
改善に……

パンテチン製剤

パントシン®

Pantosin®

一般名・Pantethine



第一製薬株式会社 東京都中央区日本橋三丁目14番10号